

コロナ禍のウッドショック

— 下仁田の林業から考える —

Wood shock during the Covid-19 pandemic

— Consideration from the Shimonita Forestry —

小井土 光 弘*

Mitsuhiro Koido

キーワード：下仁田，林業，ウッドショック，森林の役割

Key words : Shimonita, forestry, Wood shock, role of forest

ウッドショック

「木材がない!?!」2021年春のこと、ウッドショックが日本を襲った。輸入木材が入って来づらくなるなか、国産木材の需要が高まった(第1図)。いま、日本の林業にかつてないほどの注目が集まっている。重要な転機を迎えている日本の林業・木材製造業界、身の回りの木材を何気なく消費してきた私たちに、コロナ禍のウッドショックは何を問いているのだろうか。

2021年、世界はウッドショックに見舞われ、住宅



第1図 ウッドショックにより原木の在庫が少なめになっている製材工場

業界・林業界が大きな影響を受けた。ウッドショックとは2021年3月頃から、木造建築の柱、梁、土台などに使う木材の需要がひっ迫して木材の不足により価格が高騰し、大きな混乱が生じている状況の事である。2021年末でも深刻な木材不足が続き、影響は国産ベニヤ板等の新建材にまで広がっている。その主な原因は、新型コロナウイルスの影響で、木材に限らず世界中で物流が滞り、日本へ木材が運べない状況になったことである。

木材流通と日本そして下仁田

木材製品の輸入には、日本から欧米などに工業製品を輸出した際の帰りのコンテナが通常ならば使われる。しかし、新型コロナの影響で輸出自体が滞ったことから木材を積んで帰ってくるはずのコンテナが不足し、コンテナ使用料が値上がりするという状況が発生している。アメリカ、中国などでは大規模な財政出動と住宅ローンの低金利政策がとられ、多くの人がりモートワークのために新たに住宅を求め、建築ラッシュが起きた。これにより世界的に木材の受給バランスが崩れ、日本に十分な量の木材が入ってこなくなった。こうした状況を受けて国産木材の需要が一気に高まった。

2021年12月28日受付。2022年2月17日受理。

* 群馬県甘楽郡下仁田町東野牧



第2図 山林に囲まれた下仁田の美しい風景
ほたる山より望む

国土の約70%近くが森林といわれる日本列島において、下仁田町では 16,596 ha の林野面積を保有し、町全体の約88%を森林が占めている（第2図）。

しかし、1964年の木材の輸入自由化とともに国産材の価格低迷、林業の衰退・林業離れがすすみ、後継者不足・林業従事者の高齢化の問題を抱えるようになってきている。設備の近代化が進んでいるが、急な国産材の需要に供給が間に合うわけもない。多くの住宅メーカーや建築関係者はこれまで輸入木材に頼りきっていた現実と向かいあわせれ、あらためて日本の林業に目を向けざるを得なくなっている。

林業従事者主導へ

日本の建築材の多くは欧米からのヨーロッパトウヒ、ヨーロッパアカマツのラミナ材（集成材を構成する平割板）、米マツなどが使用されているが、ウッドショックにより輸入が激減し、プレカット工場や工務店が一斉に在庫確保に動いたために国内はまたたくまに木材不足に陥った。外国材がなければ国産材に目が向くのは決まりきったこと。しかし5～7月は梅雨の時期、長雨の影響で山から木を切り出すのが難しく、原木までひっ迫し、杉の原木価格も近年の1.5倍、桧の原木は2～2.5倍と上昇した。

近年、原木の価格は下がる一方で、林業従事者からすれば長年手入れし木を育てても採算があわず、将来の見通しは厳しかった。供給過多で需要者側に

主導権がある様な状態が続いていたのだが、ここに来て供給不足に陥り立場が逆転し供給側に主導権がきた。原木の価格が上昇し、木材価格上昇は山主に多くの金額が帰る。ウッドショックにより国産材に多くの人の目が向き、林業に希望の光が差し込んだ気がして、林業従事者にも将来への希望が持てるかと思われる。木を育てるには、50～60年という歳月が必要である。それを途絶えさせないためにも、山にかかわる人々が希望ある林業であり続けなくてはならない。

下仁田で木を育てる

私が林業に従事し始めたのが1997（平成9）年、バブル崩壊後の就職氷河期のことである。高校卒業後、一時県内の建設会社に就職したが、Uターンして就いたのが実家の木材製材業である。純粋な林業家ではないが山林も所持し（第3図）、必要とあれば伐採～搬出～製材もしているので林業家のひとりであろう。従事して24年ほどたち、感じるのが木造住宅の構造の変化である。中でも一番に感じるのは、純和室の畳部屋を設置する住宅が減っていることである。

和室に使う建築材は、節のない“無地材”を多数使用する、その無地材を作るためには、若木のうちから定期的に枝打ちを施して木を育てる必要がある。手間をかければかけるほど良質の木材に仕上が



第3図 ヒノキ植林地と原木シイタケ栽培（東野牧）

るが、木材単価は上昇するので住宅建設単価も上昇してしまう。ならば、金額のかかる和室は作らなくていいとなる。無地材を使わなくなれば、優良材の単価も思うように上がらない。となると山林の育成までおこなう余裕がなくなってくる。悪循環である。

国の木材自給率も一時は18.8%にまで落ち込んだことがあるが、2010（平成22）年に「公共建築物等における木材の利用の促進に関する法律」が制定されると自給率も約36%まで回復し、近年ではCLT工法（クロス・ラミネテッド・ティンバー、直交集成材）を構造材に使用した木造高層ビルの建設も進んできている。時代の変遷とともに木材の利用個所も変化する。やはり木材は優良な再生可能資源なのだと思つづく。地球温暖化の進む地球の中であって、日本は比較的水資源に恵まれた国であり、将来、森林面積の減少する他国に木材を輸出する国に変わるかも知れない。

将来に大切な林業

森林は、これまで以上に大切にしなければならぬ。森林には、きれいな空気を作り出す、厳しい気象を緩和する、貴重な動植物の生息環境を守る、きれいな水を作り出す（第4図）、災害から生活を守る、森林資源を持続的に供給、活動や保養の場を提供し文化の創造、等のさまざまな働きがあるからだ。

SDGs が叫ばれる昨今、森林は、環境への負荷の



第4図 下仁田の清流 奥栗山溪谷



第5図 端材利用の木琴

子供たちの自然教室での森林体験とともに、端材（廃材）を使って木琴をつくる。音程は、材の長さだけでなく、厚さ・材質・年輪の幅の違いなどから、たいへんおもしろい。

少ない優れた素材である木材の供給をはじめ、安全な国土の形成や生活環境の保全、安らぎや憩いを得る場の提供を通して豊かな生活へ寄与するとともに、地球温暖化防止にも貢献するなど国民の生活と深く関り、適切な管理により森林の有する多様な機能の維持・向上が図られている。また、その機能を継続的に発揮させることが重要であり、そのためにはこの下仁田において、町民に森林の価値を認識してもらおうとともに、将来生まれてくる子供たちに美しい下仁田町の自然を残すためにも森林所有者・関係者一人ひとりの山づくりへの熱意が大切かと思われる（第5図）。

資料：林業の現況

下仁田町および周辺の林業(群馬県環境森林部 2021)

2020（令和2）年度 富岡事務所（富岡市、下仁田町、南牧村、甘楽町）

素材生産者

専業6名（専従4名 臨時2名）

兼業29名（専従19名 臨時10名）

素材生産量

富岡事務所 国有林 12,952 m³ 民有林 13,080 m³

下仁田町 国有林 0 m³ 民有林 5,416 m³

（針葉樹 5,416 m³ 広葉樹 60 m³）

群馬県の林業（群馬県環境森林部 2020）

文 献

木材産業の現況

年 度	生産業者数	工場数	製材品出荷量
2010(平成22)	110	126	90,000 m ³
2019(令和元)	95	84	80,000 m ³

群馬県環境森林部（2020）令和2年版群馬県森林林業統計書．群馬県，122p.

群馬県環境森林部（2021）令和3年版木材需給の現況．群馬県，49，72p.

（要 旨）

小井土光弘（2022）コロナ禍のウッドショックー下仁田の林業から考えるー．下仁田町自然史館研究報告，7，33-36.

2021年春にウッドショックが日本を襲い，輸入木材の高騰から国産木材の需要が高まった．世界的なコロナ禍でリモートワークが増加して建築ラッシュが起きた．これにより世界的に木材の受給バランスが崩れ，国産木材の需要が一気に高まった．多くの住宅メーカーや建築関係者は日本の林業に目を向けざるを得なくなっている．

木材の供給過多から供給不足のため，需要者側から供給側が主導権を持つようになった．地球温暖化の地球にあって，日本は水資源に恵まれた国であり，将来木材を輸出する国に変わるかも知れない．森林資源にはさまざまな働きがあり，将来の子供たちに美しい下仁田町の自然を残すためにも，林業関係者一人ひとりの山づくりへの熱意が大切である．